
シークレットゲーム

89R

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シーケレットゲーム

【EZコード】

NZ3892NZ

【作者名】

89R

【あらすじ】

見知らぬ閉鎖的な場所に14人の男女が連れ込まれた。14人は首輪が掛けられ、PDAが一人一つずつ部屋に置かれていた。トランプを模したPDAには、犯人のものと思われる指令が書かれていた。

14台のPDAには、トランプの数字13個が一つずつ書かれておりジョーカーも存在する。その13個ある数字・ジョーカーに対応して首輪の条件が設定されている。また9つのルールが存在し、基

本ルールであるルール1と2は全員に、ルール3以降については一人につき2つが提示されている。72時間以内にこの「ゲーム」をクリアできなければ、全員首輪の仕掛けにより死亡する。自身に提示された解除条件は隠さなければならない。そして、解除条件には殺人を促すものが含まれていた。：

14人は生き残るため、この狂気めいた状況を受け入れ、ゲームに参加するしかなかつた。謎渦巻いたサバイバルゲームが今、始まる。

プロローグ（前書き）

どうも89Rです。

いろいろと掛け持ちしていますが、一ヶ月に一度のペースで書きたい
と思います。

どうぞよろしくお願ひします。

ご意見、ご感想があればよろしくお願ひします。

プロローグ

「車両を盾にしろ！窓や屋上に注意！」

高機動車から飛び降りながら声の限り叫んだ。乾いた大地をコンバットブーツで踏みつけ、素早く高機動車のエンジン部分を背にする。即応の防御態勢を取りながら、どうして自分は中東の殺風景な市街地で殺されそうになっているのだろうとを考えた。

陸上自衛隊の中央即応集団隸下の、特殊作戦群の小隊長を務めていた。特殊作戦群は陸自における唯一無二の特殊部隊で、最精鋭だ。そんな最強の特殊作戦群の小隊長ともあろう者が、こんな異国の地で民兵の集中砲火を浴びているのには複雑な事情があつた。

世界の警察を主張する天下の米軍様の後塵を拝して、戦火でズタズタに引き裂かれた中東某国にも自衛隊が派遣されることとなつた。人道支援だ後方援助だなどと言つてはいるが、これは実質海外派兵だ。今も民兵による米軍襲撃が絶えないこの国に、自衛隊が派遣されるのは大問題だった。戦車や戦闘機まで動員している米軍に対して、紙のような装甲の車両と軽火器だけで自衛隊が乗り込むなど、自殺行為もいいところだ。

そう言つて上官に愚痴をこぼしたすると、その上官に言われたものだ。ならちよつとお前が警備補佐としていつてこいよ、と。耳を疑つたが、それからはあつという間だつた。元々保険として特殊作戦群からも、警備の助言を与える人員の派遣が検討されていたのだ。マスコミの目があるので部隊全体で行くことは出来なかつたが、ひとりくらいは誤魔化せるだらうということで、見事に貧乏くじを引

く羽目になつたわけだつた。口は災いのもととは、よく言つたものである。

そういうわけで、警備補佐として中東某国某所の大地を踏んだ。これまでの数週間は何事もなく過ごして來たが、遂に今日災厄が訪れた。市内にある発電所の復旧作業に駆り出されたのだ。市内を軽車両だけで進むことに断固反対したが、命令でござり押しされた。どうも自衛隊が人道支援として活躍しているという、いいアピールになるとどこかの間抜けが考えたらしい。

「弾幕をはれ！」

89式自動小銃の安全装置を解除、『ア』より『レ』へと捻る。特殊作戦群では89式自動小銃ではなく米軍のM4カービンだが、今回は国産の89式自動小銃を持たされていた。89式小銃も悪くはないが、実戦で鍛えられたM4カービンと比べるとどこか心もとない。だが、今は我慢するしかなかつた。

また民兵が激しく撃ちかけて來た。盾にしている車両にて弾丸が命中し、鋭い金属音が響く。ぼさぼさの黒髪が、舞いあがつた砂のせいだ、悲惨なことになつてゐる。

「通信員、本部に至急連絡しろ！ 救護要請を至急送れと、そう云えろ！」

隣にいる無線機を背負つた隊員に、大声で命じた。その陸自隊員

は顔を青くしていたが、すぐに無線機に向かって命じられたことを
喚き始めた。だが、顔をさらに青くしながら顔を向けて言った。

「自力脱出せよ、と。救援は出せないそうです」

「無線機を奇^{アラカルト}にせー俺が話す」

無線の受話器をひつたぐると、そこへ向かって怒鳴りつけよう
に話した。

「^{アラカルト}第一小隊、奇襲を受け行動不能……多數の負傷者あり至急
救援を……」

受話器の向こうから、派遣隊の上官から返答^が来る。

「我々から救援は出せない。現在付近の米軍に連絡を取つている。
米軍の増援が来るまで自力で……」

「どいつもこいつも糞野郎だ！」

最後まで聞かずに受話器を放り出した。置かれた状況は、まさしく危機的だった。用意周到な待ち伏せを受けているのに、自力でな

んとかしろとは大層なご命令だつた。

民兵による待ち伏せは、路肩爆弾（IED）で始まつた。先頭を走つていた軽装甲機動車が路上の不審物を発見し、それを避けたが、罠だつた。回避した先に周到に偽装された本命の仕掛け爆弾があり、それで先頭の軽装甲機動車は吹き飛ばされた。

おかげで車列は停止、後退しようとしたら最後尾のトラックを RPG-7で撃破された。 RPG-7は、構造単純、取扱簡便、低製造単価、M72 LAWやAT4などの使い捨ての物を除けば対戦車兵器では比較的軽量（それでも発射器と弾頭で10kg・と、やはり重いものであるが）、しかもそのわりに高い威力を發揮するため、アサルトライフルと同じく発展途上国の軍隊やゲリラなどにより幅広く使用されている。少なくとも40か国が正規に採用しており、様々なモデルが9か国以上で生産されている。特にこの兵器によつてゲリラやテロリストが容易に戦車をも破壊しうる火力を持つ様になつた事が、いわゆる低強度紛争（LIC）の活性化の要因の一つとなつてゐる。紛争地帯ではよく見かけられる代物だ。

前も後ろも塞がれたところで、周囲の建物から民兵の猛烈な銃撃が開始された。四方八方から銃火を浴びて、陸自隊員はその場に釘づけになつた。上から撃ちおろされた銃弾が土煙を立てて着弾し、車両の装甲板に当たつた銃弾が甲高い音を立てて跳ねまわる。

「牽制しろ！とにかく銃火が見える場所に撃ちまくれ！」

命じながら、銃口を建物の窓に向けた。AKの銃火はまるで花火のようだ、昼間の今でもよく見える。銃火が瞬いた瞬間、その窓に對して短連射で五発か六発ほど銃弾を叩き込んでやつた。薄暗い窓の奥で、民兵の血しづきがはじけ飛びのがかすかに見えたが、気に

する様子も無く次の敵へと銃口を移動させていた。

実戦はこれがはじめてではない。

基本的に平和的な日本国民の前では口が裂けても言えないが、特殊作戦群は米軍とともに何度も非合法の作戦を行っている。そこで何度も敵を殺している、叩き上げのプロの兵士だ。米軍からうちに来ないかとスカウトされたこともあるぐらいだ。

屋上でAKを乱射していた民兵の頭を5.56mm×45弾でぶち抜きながら、それでもこんなひどい状況ははじめてだと思った。特殊作戦群の優秀な装備と潤沢な支援の下で、緻密に練られた作戦を遂行していたときは大違いだ。強大な米軍のサポートだつてあつた。あれが近所の裏山へのピクニックなら、これはエベレストへの登山だ。

それでも俺はプロだ。昨日・今日銃を手にした素人の民兵どもに・その差をたっぷりと教えてやる。

近くの路地裏から飛び出して来た民兵に89式自動小銃の連射を浴びせかけ、蜂の巣にしてやりながら強く思った。耳をつんざく銃声と民兵の断末魔の叫び声が重なる。空になつた弾倉を外し、素早く再装填して射撃を再開する。

「おい、お前何をやつてるんだ！ さつと撃て馬鹿野郎、死にたいのか！」

「し、死ぬ・・・本当に死んじまつ。・・・あんまりだ・・・誰か助け・・・」

車両に隠れて震えている隊員を見つけると、胸倉を掴んで引き起こして怒鳴りつけた。が、その隊員は震えて泣き「」とを言つばかりだ。実戦経験の無い自衛官の見せる弱さだ。日頃いかに訓練されていようと、実戦は訓練と違う。

戦争に行きたいなんて思う奴は戦争に行つたことがない奴だ。一度戦争に行けばいやといつほどわかる。

「黙れこの野郎、撃たなきや殺されるぞ！戦友を死なせるな応戦しろ！」

「ハツ……はい！」

平手打ちを喰らわせ、自分自身それにこれまで寝食を共にしてきた仲間がいま危険にさらされている現実を突きつけてやる事で、ようやくその隊員は恐慌状態から離脱した。鍛えられた軍人の眼には独特の迫力がある。そんな奴に殺意を込めて睨まれば、誰しも言うことに従いたくなるというものだ。

半ば脅迫めいた叱咤激励を受けたその隊員は、手にした89式自動小銃を構えると、銃火が見える場所へと手当たり次第に撃ち込みはじめる。撃つている間は恐怖を忘れることができる。

それにひとまず満足すると、現状の把握に努めた。車列は前後の炎上した車両のせいで移動不可能。下車した隊員はようやく組織だ

つた応戦をはじめ、反撃の銃弾が次々と敵の民兵を撃ち倒している。所詮民兵は民兵、厳しく訓練された軍人の反撃をとともに浴びれば、ただではすまない。このままここで防戦し続け、米軍の救援を待てば確実に助かるだろう。

そう思い、ほんの一瞬だけ油断した瞬間だった。今まで誰もいなかつた少し離れた建物の屋上に、複数の民兵が姿を現した。そいつらはAKではなく、RPK軽機関銃を持っていた。7.62mm弾が装填された75発入りの弾倉を取りつけたRPKが火を噴き、弾雨を浴びせかけてきた。奥には RPGの射手も見える。

ひき肉にされる前に、車両の陰に転がり込んだ。しかし、激しい弾幕を前に身動きを封じられる。目と右手の89式自動小銃だけを出して、フルオートで屋上の民兵に銃弾を放つが、有効弾をなかなか与えられない。相手の銃撃が激しく、しつかりとした照準をつけられないせ이다。

そうこつしているうちに、恐ろしい事実に気がついた。車列の中には、発電所への燃料補給のための小型のタンク車がいた。7.62mmの鉄鋼弾にも耐えられる程度の装甲板で囲まれてはいたが、 RPG-7で狙われてはひとたまりもない。あれが爆発したら辺り一面火の海で、間違いなく全滅だ。

「援護しろ！ 3時から5時方向の屋上に射撃を集中しろ・スリーカウント…！」

「ワン…」

「ツー！」

隊員たちが89式自動小銃を車両に身を隠しながら構える。

「スリー！！」

新しい弾倉を89式自動小銃に叩き込みながら、そう叫び飛び出した。燃料補給車目掛けて全力疾走しながら、屋上を狙つて小銃を連射する。硝煙で真喰色の空薬莢を地面にまき散らしながら、撃ち続け走り抜ける。その結果として、RPGを撃ちまくつていたひとりの民兵が5・56mm弾を浴びてひっくり返った。

一瞬だけ銃火が弱まつた隙に、燃料補給車の運転席に乗り込んだ。エンジンはかかつたままだつたので、急いでバックをする。その瞬間だつた。RPGが発射されたのは。

「がつ……！」

白煙を引きながら迫つたRPGの弾頭は、急速でバックをしたために間一髪で燃料補給車には直撃せず、運転席のすぐ前の地面をえぐつた。しかし、高速で飛び散つた破片のひとつがフロントガラスを突き破り胸を急襲した。ガラスの割れる音が響いた直後、胸に耐え難い痛みを感じて息が詰まつた。

熱い鉄棒をつき刺されたような痛みだ。

かすむ視界の中、それでも必死で燃料補給車を動かした。ハンドルを横にまわして、近くの建物の一階へと燃料補給車を突っ込みた。扉と壁を破壊しながら燃料補給車は建物の一階に入り込み、RPGの範囲から逃れる。これでひとまずは大丈夫のはずだった。

「畜生……」

シートを濡らしているのは自分の胸から流れ出ている大量の血液、左手は胸に突き刺さった熱い大きな破片を握っている。防弾衣は胸を襲ったRPGの鋭い破片を防ぎ切れなかつたらしい。それでも右手は89式自動小銃のグリップをきつく握り締めていた。銃を手放すのは、死ぬときだけ。

「ああ、俺死ぬんだろうな。なんでこんなところで、俺死ぬんだろう。政治家のくだらない点数稼ぎにつきあって死ぬなんて、馬鹿みたいだ……。」

痛みはもう感じ無かつた。ただゆつくりと視界が黒い霧に包まれていくかのようにかすんでいくだけ。何もかもが馬鹿らしかつた。代々軍人を輩出している家に生まれ、自分も国民を守るのだと何も疑わずに信じて入隊し、そこで兵士としての才能が開花して特殊作戦群にまで入った。治安を守る兵士たれ、といわれ続けてきた。

なのに、自分は嘘だらけの海外派遣で飛ばされ、どことも知れない場所で死ぬ羽目になつている。死ぬのは覚悟していたが、それは国民を守るために、あるいは国民のために死ぬ覚悟だつた。こんな政治屋どもの茶番劇につきあって死ぬなど、認められなかつた。ま

るで悪夢を見て居るようだ。

自分の死を認められなかつたが、もちろん出血はとまらなかつた。錯綜する銃声と悲鳴も、もう耳には入らない。かすんでいく視界だけが、その時のすべてだつた。

最期に見たのは右手で握りしめていたはずの89式自動小銃が足元に落して、いく光景だつた。銃を手放すのは、死ぬときだけ。

「ん・・・・・夢か・・・」

藍坂昂は昔から見る夢に誘まされていた。

どこか遠い中東の土地で銃撃戦の末、胸に重傷をおい息絶える。そんな、演技でもない夢を昔から見続けている。その夢はとてもリアルだ。それに、昂は知らないはずの事もどうしてなのか記憶にあるので、例えば、銃火器の使い方、どの様に体を動かし相手を無力化するなど。

なぜ自分の知らないはずの記憶があるのか、初めは不思議に思う時期があつたが現在ではその記憶、いや『知識』に救われた事があ

るので感謝はしている。

中学2年の時に、道を歩いていて知らない少女が高校生の集団にからまれていた。少女2人に高校生5人だ。誰が見ても中学生が止めに入つてかなうはずはない。周りの通行人も高校生に、ひと睨みされ目をそらす。

「あのーすいません」

突然声を掛けられ高校生がいっせいに振り返る。

「その子たちも困っていますし、そろそろ諦めたらどうですか?」

「あああー、何だてめー」

「どうやら俺の言葉で不機嫌になつてしまつたようだ。めんじくさいな。

「てめー、中坊のくせに生意氣だな」

「俺たちがお前をたたきなおしてやるよ。ちよつといつちよつとい

昂は路地裏に連れ込まれた。先ほどからまれていた少女たちも一緒にだ。高校生の方々は、どうやらいたい思いをしなければわか

らないらしい。早く終わらせるか。

自分でスイッチを切り替える。

路地裏には高校生が5人転がる結果になつた。少女たちからは感謝されたが、俺は感謝されたくて助けたわけではない、ただ高校生が気にくわなかつただけだ。

そんな事もありこの『知識』は一応役にたつてゐる。

高校に上がり、いよいよ高校生活が始まるんだと思つて矢先に両親が事故に死んだ。残されたのは俺と妹だけだ。俺はどんな事をしても妹を守ると誓つた。高校にかよいながらアルバイトをして生活費を稼いだ。幸い両親が残してくれたお金が残つていたが妹と2人で生活していくには足りない。

お金はいつかはなくなる。

目が覚める。だが、目の前にはいつもの天井ではない天井が広がつていた。

プロローグ（後書き）

いかがでしたか？
主人公は前の記憶をいかしゲームに生き残れるか・・・
お楽しみください。

人物設定（前書き）

「いつも、やつと設定が決まりました。
どうぞ、ご覧下さい。」

人物設定

名前：藍坂昴 あいざか あい

本作の主人公で、18歳の高校生。帰宅部でアルバイトをして生活稼いでいる。運動神経は相当高く

、喧嘩は今まで負けた事がない。アルバイトと筋トレで体を鍛えていたためよく鍛えられているが無駄な筋肉はない。基本的には陽気な性格で他人をからかうのが大好きな一面もある。咄嗟の判断は的確であり、頭の回転は速い。

2年前に両親を交通事故で亡くし妹と一人暮らしで生活している。両親の残してくれたお金があるが2人で生活していくには足りないためアルバイトをしている。

知らないはずの事もどうしてなのか記憶にあり、その知識をいかして生活してきた。昴本人は便利だな、ぐらいにしか思っていない。突然「ゲーム」に参加させられるが、いち早く現実を理解し、行動する。

名前：藍坂葵 あいざか あおい

昴の妹で両親が死んでから部屋に閉じこもる事が多くなったが、昴のおかげで少しずつ立ち直っていき現在では元気を取り戻している。兄の昴の事がとても大好きで大胆な行動に出る事もある。

陸上の全国大会にも出場したこともあるぐらい運動が得意。だが、

料理が壊滅的でいつも昂が作っている。

人物設定（後書き）

この設定は、今後少しづつ付け足していくかもしれないのにご了承ください。

遭遇（前書き）

どうせ89Rです。

最近は忙しくなかなか投稿できませんでしたがやっと時間を作る事が出来ましたので投稿しました。どうぞお楽しみください。

昴は痛む体を起こした。

「……は・・・・・いつたい？」

毎日の朝の目覚めと大きく変わっていた。近代的なコンクリート造りの部屋だ。

カーペットが敷かれ、高級そうなアンティークな家具類が置かれているが、どれもぼろぼろだ。家具類だけではない、部屋のいたるところも埃がたまっている。昴が寝ているベットときたら汚れているだけでなくスプリングが飛び出している。元が高級そうな家具であるだけに、その異様さが引き出されている。

「誘拐されたか？」

昴はなぜ自分がこのよつたな状況におちいつているかしつかりと覚えていた。

バイトが終わり帰路についたとき薄暗い路地でいきなり後ろから男に襲われた。だが、昴はそれをかわし回し蹴りで男を静めたがその男を調べようとしていた時に右肩に痛みが走った。

麻酔銃で撃たれたのだ。昴はこのとき後悔した。男の仲間がいるか考える前に男を調べようとした事にだ。

視界が少しづつぼやけてくる。それでも少しでも人がいる方に足を動かしていく。だが数歩あるき倒れた。

最後に見たのは黒い服をきた何者かが自分に近づいてくるところだった。

まだ体が思うように動かないなか、昂はなんとか体をベットから起こす。

「なんだ・・・これ。首輪か？」

昂は首に触れて自分の首に巻かれているものに触れる。
硬く滑らかでひやりとした金属の感触があった。昂は両手を首の周りを這わせた。するとそこにはぐるりと首の周りを一周する、金属の輪がはめられていた。

直径はい1cmから2cmといったところだ。かまぼこ型の金属棒を輪にした構造を創造するといいだろ。

かまぼこ型の底面が首に密着した首をぐるりと一周している。その構造のおかげで首輪には指先を滑り込ませる隙間もない。また弧を描いている表面には取っ掛かりらしいものはほとんどなく、触った感じでは繋ぎ田はみつからなかつた。

それより今は首輪の事は置いといてここは何処かだ。

家具類だけなら病室にも見えるかもしけないが、こんなに汚れて

いれば失格だろ？。

体には特に傷を負つて いる様子もなく、服装もバイト帰りの黒のジーパンに白のシャツ・黒のジャケット・黒のスニーカー・昂はそれほど服にこだわりがないため地味な色の服しか持ち合わせていない。前に妹にもう少ししゃれしたらと言われたが自分では着れさえすればどうでもよかつた。

昂はなぜ自分が誘拐されなければならぬのかわからなかつた。確かに不良の奴らをボコボコにしたことは何度もあつたが、誘拐されるほど恨みをかつた覚えはない。

それに、昂は一般的な家庭であり現在の経済状況は両親が残してくれたわずかばかりのお金と、昂が働いて稼いでいるアルバイト代しかないと ため金銭目的でないことはわかる。ではなぜ俺は誘拐されたんだ。

とりあえず情報を集めて、それから考えるか。

部屋を見渡すとテーブルの上に昂が誘拐される前に持つていたバックが置いてあつた。

昂はバックに罠が仕掛けられてないかどうか調べて中身を確認した。中身は誘拐される前と同じで、携帯が中に残されていたが誘拐犯がわざわざ外との連絡手段を残しているはずもなく、予想どおり携帯は圈外だ。昂は携帯で自分の首に巻かれている首輪を確認するために写真を撮つた。

その画像には銀色の首輪が巻かれている。そのときバックの下から電子音が聞こえた。

「PDA?」

バックの下には見慣れないPDAが1台置かれていた。どこにもメーカーを表すような刻印はなく、ディスプレイに大写しになっているトランプのカードだった。

「JOKER・・・・・?」

PDAは見た目より軽く、大きさは縦10?、横6?程度でトランプをモチーフにしているためか極めて薄い。ディスプレイはPDAの大部分を占めており、ディスプレイの下には小さなボタンが備えられていた。

また裏側はトランプの背中側のデザインを踏襲とうしうしており、白枠の中に格子模様が描かれている。

それにしてもトランプへのこだわりは相当なものだ。それに比べ奇妙なのが、PDAの側面と底面に用意された2つのコネクターだつた。

そのコネクターは明らかにPDAそのものよりも厚みがあり、扉はその2つだけがトランプの意匠を崩しているように思えた。

PDAに備えられたボタンを押し込むと、バックライトが点灯して画面が明るくなる。そして次の瞬間PDAの画面は新しい表示に切り替わる。

『ルール・機能・解除条件』

「ルール…………？解除条件はこの首輪についてか？」

指先で文面を追うと画面が切り替わる。どうやら操作はタッチパネル式らしい。

『貴方の首輪を外すための解除条件』

『JOKER：プレイヤーを殺害したプレイヤーを殺害する。または、AのPDAの所有者、9のPDAの所有者の殺害。手段は問わない。なおこのルールは1日と6時間経過すると変更される』

ルール1

参加者には特別製の首輪が付けられている。それぞれのPDAに書かれた状態で首輪のコネクタにPDAを読み込ませれば外す事ができる。条件を満たさない状況でPDAを読み込ませると首輪が作動し、15秒間警告を発した後、建物の警備システムと連携して着用者を殺す。一度作動した首輪を止める方法は存在しない。

ルール2

参加者には1 - 9のルールが4つずつ教えられる。「えられる情報はルール1と2と、残りの3 - 9から2つずつ。およそ5、6人でルールを持ち寄れば全てのルールが判明する。

ルール5

侵入禁止エリアが存在する。初期では屋外のみ。進入禁止エリアに侵入すると首輪が警告を発し、その警告を無視すると首輪が作動し警備システムに殺される。また、2日目になると侵入禁止エリアが1階から上のフロアに向かって広がり始め、最終的には館の全域が侵入禁止エリアとなる。

ルール8

開始から6時間以内は全域を戦闘禁止エリアとする。違反した場合、首輪が作動する。正当防衛は除外。

「（もしこのルールの内容が本当だったら、俺が助かるには誰かを殺さなければならぬ……）」

昴はPDAを操作し時間を確認する。

まだ始まつたばかりか。まずは他のプレーヤーでも探すか、ルールが全部わかるまで下手に動けないからな。

それにしてもこの建物は広いな。

昴は目覚めた部屋からPDAに載っていた地図を見て移動を開始していた。こんなに広くて誰かにめぐり会えるのだろうか。そんな事を思つていると角を曲がったところで初めて他のプレーヤーにめぐり合つた。

目の前にいるプレーヤーは快活でボーグッシュな少女だ。

昂が少女に話しかけようとすると少女は身を翻し走り出した。

「あれ、俺ってそんなに怪しい奴に見えるのか・・・・・・」

世間一般から見て、昂の顔は悪くはない。中の上、人によるが上

軽くくじむ。うてそんなことしているひまない。

「待つてくれ！」

俺はすぐさま少女の後を追いかける。少女が逃げている通路は俺と少女が鉢合させした丁字路の左の通路だ。

走りには自信がある昂だが少女もなかなか走るのが速い。

あと少しで追いつくところで昂は気がついた。少女が走っている先の方に細いワイヤーが張られている。

「（罵だーー）」

昂はワイヤーが直感的に罵だと判断した。少女は俺に気を取られワイヤーに気がついていない。

「止まれー罵だーー」

「えー」

「（へそつー間に合えーー）」

昂が叫ぶ。だが一度少女がワイヤーを切ったところだった。左の壁から勢いよく何かが飛び出した。その物体は少女の首に掛けた迫り来る。少女も突然の事で反応できていない。

昂は勢いよく床をけった。少女を守るため。

「あああーー？」

「くつ……」

昴は少女を守るように抱きしめながら倒れる。

バキッ！

その壁から飛び出した物体は一度少女の首の高さの位置で反対側の壁に突き刺さっている。コンクリートを崩し突き刺さっていたのは大きなナイフだ。

「離してつー」

少女は恐る恐る田を開ける。そして、現在自分が昴に抱きしめられている事によつやく気がつき何とか逃げよつとするがそれを昴が止める。

「離すと逃げるだらう。少し落ち着け」

「くつー」

力では昴にかなわないと思つたのだろうとなしくなつた。おとなしくなつた事を確認すると昴は立ち上がつた。

「立てるか？」

昴が少女に手を差し伸べる。

「・・・・・」

少女は警戒しながら俺の手をとつて立ち上がる。

「さて、落ち着いといひで質問なぜ俺から逃げたんだ？」

大体検討はつぐが一応聞いておくか。

「・・・・・」

「・・・・・」

沈黙が続く。

「だんまりか仕方ない。おおかたルールを見てだれも信用できない

んだろう？」

「…？」

昴がいつた言葉がどひやせり当たつりしこ。

「俺は君に危害を加える事ができない今わね」

「…・・・・・今わ？」

「そつだ、ここのPDAに載つていいルールで開始から6時間以内は全域戦闘禁止エリアになつていい。もしここのルールが本当ならば俺は君に危害を加えればここの首輪に殺される。もちろん君が俺に何かすれば君も死ぬ」

「…・・・・・それじゃあ、戦闘禁止が解除されれば私を殺すの？」

少女が一步下がる。

「…・・・・・いや、俺は君をどひやせるつもりはないよ。それより共闘しないかい？」

「共闘？・・・・・」

「そうだ」

俺はまずルールを把握する事にしたそれに仲間がいたほうができる事が広がるだろう。この子には、誰か大切な人がいるのだろうなんとなくそう思えるのだ。

「なんで・・・・・私なんかと・・・・・」

「理由は俺と似ているからかな」

「似てる?」

少女は首をかしげる。

「ああ。俺には妹がいるんだ。だからどうしても帰らなきやならない。君にもいるんじゃないかな大切な人が、どうしても会わなければいけない人が」

「・・・・・・・・・」

少女は少し考えるそぶりをする。

「いいわ。しばらくは貴方と行動を共にする

「ありがとう。俺の名前は藍坂 昂だ。好きによんでくれ

「・・・北条かりん」

「うして俺は北条さんと一時的にだが行動を共にする事になった。
これからどうなっていくのか正直俺にもわからないが、わかった
らそいつはエスパーか何かだ。まあ、なるようになるか。

遭遇（後書き）

いかがでしたか？
ご意見やご感想があればどうぞよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3892z/>

シークレットゲーム

2011年12月27日19時53分発行